

2025年度 日本文化人類学会 次世代育成セミナー  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 文化／社会人類学セミナー

## 発表要旨

A会場－1

アナキズム的な想像力を拡張する不法人類学  
——ネパールにおける露天商と公共空間の利用に関する民族誌

北嶋泰周（京都大学大学院）

本稿の目的は、ネパールの首都カトマンズで「不法行為者」とされる露天商から市民社会のあり方を捉え直すことで、我々が自明視してきた〈合法と不法〉の境界を一時的に瓦解し、合法なる領域から不法なる領域への到達がもたらす社会想像力の拡張を人類学的に検討することである。法人類学では、国家法に加えてローカルな制度や規範といった複数の法秩序が共存するという「法多元主義」の立場が取られたが、これは記述的な事例研究に留まり法改革の次元には至っていない。古典的な人類学に代表されるアナキズムの議論は、国家を前提としない社会秩序の解明に寄与してきたが、現代社会を生きる我々との距離感が課題とされた。そこで日常生活からアナキズムの萌芽を捉える議論も行われてきたが、国家と共存する自律的な社会秩序では、社会契約が制限してきた自由と諸権利の再獲得が困難かつ、自助努力に基づく新自由主義の論理を補完しうる危険もある。そこで本研究が着目するのは、国家（法／権力）によって“正当”に排除される「不法領域」である。本稿が掲げる国家の外側に位置する領域から照射される「豊かな社会」の民族誌的解明は、それと共にないがゆえに国家の変革や部分的解体を要請することができる潜在性を有する。事実、カトマンズの露天商たちは国家に頼れないからこそ自律的な社会秩序の形成に迫られ、それが自らの生を価値あるものにしていく契機となっている。そして不法行為に基づく閃き＝萌芽的想像は、歩道橋の潜在的でヴァナキュラーな空間性を発現させ、それは彼らが都市で生き続けるための基盤として確立されていく。

キーワード [アナキズム、〈合法と不法〉、露天商、公共空間、ネパール]

A会場－2

新たな環境と〈受け継がれた暮らし〉のあわい——社会関係資本からみるベンベ人の再定住  
小宮理奈（東京都立大学大学院）

本論は、コンゴ民主共和国から難民キャンプを経て米国 A 州に再定住したベンベ人の生活を、〈受け継がれた暮らし〉と新しい環境の接点に焦点を当てて描く。筆者は A 州に居住する 20 名へのインタビューを実施し、社会関係資本論を枠組みに複数の領域を横断的に検討した。

家庭では、食や言語、メディアを媒介に「ベンベらしさ」が日常的に再生産されていた。また、互助組織ムベンベ・ムボンドは葬儀や家庭内トラブルの支援、通訳などを担い、ボンディング・ソーシャル・キャピタルの中核として機能している。これらの実践からは、難民キャンプ期と再定住後の生活のあいだに連続性が見出される。

一方、生計活動の領域では連續性が保たれていない。キャンプで培われた職能は米国で評価されず、多くが単純労働に従事していた。安定した生計を営む人々は、むしろキャンプ期にルールを逸脱して築いたネットワークを活用しており、制度を順守してきた者が報われず、柔軟に行動した者ほど新環境に適応しているというアイロニーがある。この脆弱な環境の中で、同胞間の職紹介が重要な役割を果たし、ボンディング・ソーシャル・キャピタルが雇用連鎖を生み出している点が特筆される。

一方、こうした閉じた結束の内側から、ブリッジング／リンクング・ソーシャル・キャピタルの芽も生じている。宗教活動ではボランティアや越境的信仰ネットワークが他者との協働を生み、教育の領域でも非ベンベ人との交流が広がっている。また、ムベンベ・ムボンドは行政や国際機関との協働を通じ、リンクング・ソーシャル・キャピタルへの接続を拡張している。しかし、コミュニティ内部には緩やかな「ほころび」も生じつつあり、家庭内問題を警察に直接相談する女性たちの姿に見られる。

総じて、ベンベ人の再定住過程は「喪失」や「同化」ではなく、〈受け継ぐ〉と〈開く〉の動的なせめぎ合いとして把握される

キーワード [難民、再定住、米国、タンザニア、社会関係資本]

### A会場－3

#### **Hollowed-Out: Development and curtailment of political mobilization against U.S. militarization in Okinawa, Japan**

浅井千慧（所属なし）

Based on two-months fieldwork in Henoko, Okinawa, this research captures the palpable atmospherics of Henoko and affects of those living in the town and the way they are embedded in the political-economic structure formed through significant financial aid from the Japanese government. Post-developmentalists see development as the smooth penetration of discourse and subsequent reconfiguration of material reality. Nevertheless, this excessive focus on representation neglects to uncover how people on the ground live with, navigate through and confront the development regime in their everyday lives. Aligning with the idea of understanding development as everyday processes regenerated by subjects, my research shows how the significant financial provision from the central government and the subsequent establishment of trade-off relations between development and militarization significantly contribute to the ongoing diminishment of resistance movements in Henoko. First, I provide granular details of how protesters narrate their continuous diminishment of their everyday protests. Second, in order to locate this plunge of political mobilization within the political-economic structure, I depict how production of employment opportunities and expansion of welfare services that comes with the development scheme shapes social relations in Henoko insofar as they make the local feel afraid of critically engaging with it for the purpose of securing their relationships with others. By centering on quotidian affects

produced by this development, I want to foreground my argument the longstanding retainment of U.S. military bases in Okinawa is enabled not just by the fierce police violence against protesters as dominantly imagined but also by the continuous tailoring of social relations through the provision of significant national capital in order to let the local themselves curtail and supervise the dissensus. By shedding light on the political capacity of development to reshape social relations, this research calls for understanding development not merely as the infusion of economic benefits but as the creation of a society that aligns with the political goals of the state.

#### A会場－4

##### 喜捨と市の循環——カメリーン北部・ンガウンデレのウシ市における商人のサダカについて

新川まや（京都大学大学院）

カメリーン北部の都市ンガウンデレ (Ngaoundéré) 周辺のウシ市では、ウシと貨幣の取引が行われる一方で、商人どうしのあいだで返礼を前提としない現金の贈与が「サダカ (şadaqa/sadaka)」としてしばしばやり取りされる。本稿は、このサダカがなぜ商人たちのあいだで多用されるのかを、イスラームの論理とウシ市の取引慣行が重なりあう実践として分析し、その意味と機能を明らかにすることを目的とする。

サダカは、イスラームにおける自発的な喜捨であり、教義の側面からは、宗教的罪の浄化や来世における報酬の増加と結びつく。そのため、人びとは喜捨の動機を「神のため／神から報いを受けるため」と説明する。先行研究は、こうした神と人の相互作用とその実践の社会的意味・機能を説明するために、いくつかの関係枠組みを提示してきた。しかしながら、議論の中心にはなお神との互酬性が置かれており、こうした分析枠組みではウシ市という場で、しかも同業者に対して金銭の贈与が頻繁に生じる実態を十分に説明しきれない。

そこで本稿は、「神との交換」という視点ではなく、喜捨のやり取りにみられる「神を第三者として配置する」ふるまいに着目する。その結果として明らかになったのは、ウシ市において金銭を与えるという行為は、「神の明示的な配置」、「受け手起点の祈り」そして「贈与の忘却」という一連のふるまいを通じてはじめて「サダカ」として立ち上がり、こうしたやり取りの仕方が商人たちを市の取引循環へと再接続させることを示す。

キーワード [喜捨、サダカ、ウシ市、イスラーム、カメリーン]

**B会場－1****迂回としての「チブ」****——韓国のグリーンハウスにおける家族と世帯の改編****羅孟晋（東京大学大学院）**

近年の韓国家族研究では、生計基盤の脆弱化に伴う「脱家族化」の趨勢が観察され、家族主義イデオロギーに内在する自己矛盾も批判的に論じられてきた。しかし、下降移動に直面する一部の帰農者（都市から農村へ移住した営農者）は、こうした潮流とは対照的に、産業化以降強まった家族・ジェンダー秩序の両義性を資源として活用し、苺栽培やグリーンハウス農業景観と接合されるなかで、自らの生を中産層的核家族の理想に照準を合わせ直している。本稿は、帰農した苺栽培者による家族と世帯の改編に焦点を当て、その過程で顕在化する両義的な規範性のあいだを「迂回」する倫理的能動性を考察する。

帰農者の苺栽培は、初期投資による負債と技術蓄積期のリスクを甘受しつつ、核家族の長期的な生計基盤を確保するための決断となっている。こうした帰農は、苺との相互順化的関係や、温室内の「都市的な」住居、「情」に覆われる移住労働力の搾取、不均衡なジェンダー役割を基盤として、暫定的・過渡的な「チブ」の形態を創出する。そこでは、個人的な計算や願望がしばしば家族の未来像へと拡張され、流動的世帯構成や矛盾する自己像を通して、親子・夫婦・労使の対立を回避しつつ核家族的関係を維持する。こうした迂回としての「チブ」は、既成制度における不平等、支配、機能不全を温存しつつも、急激な社会変動や不確実な未来に対応する脆弱な生き方を生成している。本稿は、両義性にさらされる脆弱性と、それを巧みに培う能動性とが交錯する迂回の軌跡を、危機と代案という二項対立以外の第三の「脱家族主義人類学」へのアプローチとして提示する。

**キーワード** [チブ、迂回、家族、世帯、両義性、帰農、韓国]

**B会場－2****インターネット時代の女性ダランの登場****——ニ・エリシャ・オルチャルス・アラッソの活動とファン・コミュニティの形成****岸美咲（総合研究大学院大学）**

本研究は、中部ジャワの影絵人形芝居ワヤン・クリ *wayang kulit* における女性ダラン *dalang*（人形遣い）の活動に注目し、非芸術家系出身で、芸術大学でダランの技術を学んだニ・エリシャ・オルチャルス・アラッソ Ni Elisha Orcarus Allasso (1993-) の事例を検討する。従来、ダランは男性かつ芸能の家系出身とされ、女性の活動は周縁的とされてきたが、近年女性ダランが活躍の場を広げ、社会的認知を得つつある。本稿は、ニ・エリシャが短期間で広範な観客の支持を得た経緯を明らかにすることを目的とする。

調査の結果、師である故キ・セノ・ヌグロホ Ki Seno Nugroho (1972-2020) の助言を受け、彼女がまず女性歌手シンデン *sinden* として舞台上で「スラウェシのシンデン」という独自のキャラクターを構築し、YouTube のライブストリーミングで上演が拡散されたこと、加えて、

Facebook・WhatsAppによるファン・コミュニティの形成や、Instagram・TikTokにおける動画の拡散が活動を支える基盤となっていることが明らかになった。

2010年代後半以降、急速にYouTubeでのワヤンのライブストリーミングが浸透した。オンラインでの鑑賞は会場での身体的・共同的体験とは異なり、個人的かつ移動しながらの鑑賞を可能にし、観客の知覚や参加の様式を変容させた。ファンへの聞き取りからは、YouTubeのライブチャットやWhatsAppでの直接的なコミュニケーションが観客同士および演者との関係をより近づけ、インターネットの普及がワヤンの娯楽性を高めたこと、若年層など新たなファン層を生み出したこと、女性ファンがニ・エリシャの活動を支え、かつ従来、劣るとみなされてきた女性ダランの高い声が再評価されつつあることが明らかになった。これらは女性ダランに対する社会的評価やジェンダー規範の再構成に寄与している。

本研究は個別の事例を通じて、ワヤンがインターネット時代にどのように変容し、観客と演者の関係や人々の演者に対するジェンダー認識が再編されるかを示し、メディア人類学的・ジェンダー的視座から芸能研究に貢献する。

## B会場－3

### 野生動物と情報と人を管理する

#### ——日本のシマフクロウ保護増殖事業をめぐるドキュメントの人類学

韓智仁（大阪大学大学院）

ドキュメントの作成と配布は現代社会に不可欠な活動であり、官僚制的文書主義に基づく行政事業の報告書はその典型的な代表である。しかし配布資料のなかに非公開情報が含まれるとき、その実践はいかにして社会的機能を果たすのだろうか。本稿は、文書をめぐる人類学や科学技術社会論(STS)の議論を継承しつつ、これまで検討が手薄であった文書の物理的な「配布」と「回収」のプロセスに着目し、ドキュメントのライフサイクルを民族誌的に記述・考察する。

事例は、環境省が主導するシマフクロウ保護増殖事業の検討会議である。この事業は「隠して守る」という方針のもと、この鳥類種の生息地情報が徹底して非公開とされている。すなわち、情報が記された文書の管理が野生動物の管理に直結している事例である。本稿はとくにアクターネットワーク理論的な観点・関心から、会議資料の作成、配布、回収という具体的な実践を記述・分析し、「ドキュメントが何をするのか」を問う。分析を通して、ドキュメントがシマフクロウを人々が操作・介入できる対象へと編成し、関係者の行為を方向づけ、「情報の貸出し」とでも呼べる実践も伴って情報の非対称性を作り出すことで、行政の文書の正当性を編成している様を詳らかにする。以上をとおして鳥を増やすという事業は、あわせて人や情報をも管理する事業であり、その複雑な活動の条件を、紙というドキュメントの物質性が担っていることを明らかにする。

キーワード [文書・ドキュメント、希少種保全、官僚制、アクターネットワーク理論、物質性]

B会場－4

**Flight and Reterritorialization:**

**Religious Migration and Boundary Practices among Taiwan Indigenous Peoples in Belize**

Fasa' Namoh (Graduate Institute of Building and Planning, National Taiwan University)

This paper explores the religious migration of the Paiwan people from southern Taiwan to Belize during the 1990s, a transnational movement inspired by apocalyptic prophecies within charismatic Christianity during the Third Taiwan Strait Crisis. Unlike typical migration driven by economic or political factors, this exodus was motivated by spiritual conviction and collective faith, as Paiwan believers interpreted the threat of war as a divine sign to seek refuge in a “promised land.” Drawing on long-term fieldwork in Belize (2023–2024) and archival analysis, this study examines how religious beliefs, political crises, and Indigenous cosmology converged to produce a distinctive form of mobility and reterritorialization.

The paper situates the Paiwan migration within broader discussions of Indigenous transnationalism, highlighting how faith-based movements challenge the assumptions of conventional migration theory and state-centered governance. It argues that Indigenous migration cannot be reduced to rational economic behavior but should be understood as an act of spiritual agency embedded in historical, geopolitical, and cultural contexts. Through the concept of reterritorialization, derived from Deleuze and Guattari, the study demonstrates how Paiwan migrants reestablished their cultural and religious life in Belize, constructing churches, cultivating land, and preserving language and ritual practices that connect their new environment with ancestral memories.

In Belize, the Paiwan community transformed faith practices and agricultural labor into spaces of cultural regeneration. Churches became sacred centers of both worship and the transmission of identity, while farming and seasonal celebrations reactivated collective relationships with the land. Second- and third-generation Paiwan have since negotiated hybrid identities, including Belizean, Taiwanese, and Indigenous, often expressing their belonging through digital communication and transnational church networks. These “digital villages” sustain kinship, ritual exchange, and intergenerational learning across borders.

By comparing the Paiwan experience in Belize with earlier Amis migration to South Africa, this paper illuminates the diverse expressions of Indigenous transnational life in the global era. It concludes that religious migration, as a form of Indigenous reterritorialization, not only redefines the boundaries of faith and homeland but also challenges modern states’ control over mobility and belonging. Ultimately, the Paiwan case reveals how Indigenous peoples, through their beliefs and practices, create new landscapes of survival and community amid the uncertainties of global crises.

Keywords [Migration of Indigenous people from Taiwan, religious transnationalism, political boundaries, Belize, Paiwan]